



東九州支部報



平成21年度支部定例総会(4月17日(土)・大分市「コンパルホール」にて)

《 も く じ 》

平成21年支部定例総会開催	1
遠見塚ほか	2
陣ヶ尾・伊勢山・猪口山	3
大力山ほか	4
向うかまど谷廻行②	5
英・湖水地方トレッキング②	6
アルプス旅行記①	6
私の無名山ガイドブック 37	7
お知らせ	8
後記	9

平成二一年度支部定例総会開催

支部創立五〇周年記念行事に 向けての準備など活発に討議

去る四月一八日(土)午後六時より、「コンパルホール」(大分市府内町)で、平成二一年(二〇〇九年)度東九州支部の定例総会が開かれた。総会には支部会員・会友 名(内委任状 名)が出席し、開会に当り議長に佐藤浩史副支部長を選出して議事進行が行われた。

最初に梅木支部長があいさつに立ち、「今年度は公益法人制度の改革による、公益的事業の実施と、その実績が求められるようになる。そのために、支部の活動も会員以外の、広く一般社会の人たちに貢献できる、いわゆる公益的事業をより多く実施する必要がある。また、二〇一〇年(平成二二年)に迎える支部創立五〇周年の記念事業実施に向けて、今年はその前年度として、各種の準備など具体的な取り組みを開始する年である。各事業に支部員の積極的参加をお願いしたい」とあいさつがあった。

その後、平成二〇年度の事業報告、会計決算報告、会計監査報告があり、報告通りに承認された。

続いて、平成二一年度の事業計画(案)、予算(案)の提案があり、質疑討論が行われた。この中の主なものとして「公益的事業として具体的にどのように取り組むのか」「青少年体験登山大会では、子どもの参加が少ない。もっと子ども参加を増やす努力をすべきだ」「支部活動を部外者に知ってもらい、青少年登山大会などのPRにも役立てるため、支部のホームページを作ったら良いと思う」などの意見や提案などがあり、支部長より、「障害者支援登山や清掃登山などのほか、支部員が個人的に公益的目的の行事に参加する場合なども評価に入ると思う。青少年登山大会はもっとPRの方法も考

えていきたい。支部員も自分の身近な子どもたちを誘うなど、努力をお願いしたい。ホームページ開設は役員会でも課題になっている。引き続き検討したい。こうした今後の活動強化のために、役員スタッフの補強も考えたい」などの答弁があった。

この後、支部創立五〇周年記念事業の実施計画について提案があり、記念事業として(一)記念行事①記念式典②記念講演会③記念祝賀会④記念資料展示会⑤記念山行(二)記念誌の発行(三)記念海外遠征登山の実施などの事業を展開すること。記念式典・講演会・祝賀会等の主行事は平成二二年十一月六日(土)に、記念山行(国内)は七日(日)に鶴見山系で実施する。他の事業等はこれらの日程とリンクさせる。これらの事業を展開するために、昨年度設置した実行委員会(全支部会員・会友が必ず何らかの任務に就く)で手分けして具体的準備を進める。

記念誌については、別途編集委員会を作って作業を進めるが、最も重要な**支部員の投稿**については、**今年の十二月末**までに担当者に送るよう提案があった。

次は役員の改選で、今年度は二年に一回の改選期であるが、五〇周年を控えるときであり、支部長は梅木秀徳会員が引き続きつとめることとなり、他の役員については後日支部長が会員の中から指名することとなった。

総会終了後のアトラクションで

は、西孝子会員が「ヒマラヤの山なし」と題して、ネパールの山行の報告があった。このなかでは、これまで一五回登ったというカラパールヒマラヤの経験や思い出ばなしなどが、スライドを交えて行われた。

(文責 飯田勝之)

月例山行報告

遠見塚(115.4m)

ほか

(二月月例山行)

牧野信江

一月十八日(日)午前六時、サニー出発。天気、曇のち一時雨。一月は100mの山です。予定の山だけでは時間も余るので、ほか二万五千分の一地図では「杵築」の、日出の丸尾川をはさんだ地域の三角点を主に回りました。一番目は「高須」(四五・二m)という点名で、四等です。小



(遠見塚三角点にて)

高い丘で、杵築市中心街から八坂川河口をはさんで少し離れて見るところにあり、N.T.T.の電波塔がそばに立っていました。一〇〇m手前まで車で上りました。二番目は今日の当初予定に入っていた琴平山(こんびらやま・一〇二・一m)で、点名は「立花」となっている山で三等です。高須から少し南に行った県道から入り、民家の前を通ってミカン畑の脇を上って五分足らずの登りです。ヤブの中に標石がかくれているので、周囲の木などを切りました。近くには金比羅宮の石の祠がありました。服に種がよくくっつく草はセンダングサというのだそうです。

三番目は今日の予定の山で「遠見塚」(一一五・四m)です。車

が山頂近くの駐車場まで上り、遠見稲荷の参道を歩いて登ると、稲荷社の拝殿の裏に回ったところに一等三角点がありました。得丸さんが、人間魚雷の回天が置いてある場所がこのあたりにあると言っていました。

四番目は「真那井」(七七・四m)で四等です。真那井のはずれから畑道に入ったのですが、地図にある道は途中からものすごいヤブで通れませんが、雑草と笹と竹やぶを回り込んで、登りながら西さんと飯田さんが会話をしています。「たった七七mしかないのに苦労させる山だな」「七七m?今年、(真那井・七七・四mにて)



私は「喜寿よ」「ああ、この山はちよほど良い数字だ。ついたら西さんの喜寿のバンザイをしよう」石川さんたちのナタが活躍で、

ベテランの勘とGPSのおかげで、竹やぶの中の三角点に到着しました。途中には、ミカン畑のあともあり、ヤブの中に放置されたネーブルの木に実がいっぱいついていたので、いただきました。大きなタブの木もありました。

五番目は「秋貞」(二九・九m)、四等です。糸ヶ浜休暇センター手前の、道路のすぐ脇にありました。

このあと、新年会ということで、糸ヶ浜公園でシシ鍋会です。猪肉は石川さんが持ってきてくれ、遠江さんが鶏肉やダンゴや野菜や味つけの準備してくれていました。本当に美味しくて、よく食べました。にぎやかな新年会で、みんな西さんの喜寿を祝って、支部旗に寄せ書きをしました。

六番目は「軒ノ井」(三〇・六m)、四等です。大神ファームから畑の中を歩いて、民家の横を通って裏手に回ると、竹ヤブの中にありました。総勢一五名が歩くので、家の人が驚いて「何事か」と聴き、犬も吠えていました。ここもすぐ近くに小さな神社がありました。

七番目は「中山」(三二・七m)、三等です。ここは比日ノ浦というところの民家の裏のヤブの中です。GPSでこの辺だと、皆で倒木を上げたり、木を切ったりして探してもなかなか見つかりません。しばらくして安部先生が「あった」と、なんと、わずか三mほど離れ

(甲山・三三・七mにて)



この基準点をもとに、任意の場所の位置を正確に知ることができません。一等から四等まで全国に十万余くあります。

今では、この三角点を求めて登山や旅行する人が増えているそうです。今回参加して、三角点について、高い山の頂上だけにあると思っていたので、意外でした。

最後のあたりでポツポツと雨が降ってきただけで、天気にも恵まれて楽しい一日でした。

参加者：安部、飯田、石川、岐部、久保、佐藤(壮)、遠江、徳丸、中野、西、牧野、宮本、(以下グループホーム)橋本、石川、奥

たところに発見しました。皆で点を前にヤブを背景に、今日七回目の写真におさまりました。そして、この後、現地解散となりました。今日は宮本さんが宇佐より、グループホームの方、三人をつれて参加されました。

二万五千分の一の「杵築」の地図を見ると、一枚の中に一八(見落し)があるかもしれません(三角点はある地点とあります。三角点は、ある地点とある地点の距離や角度を三角測量という方法で求めるための基準となる点で、平面上の位置の測定点(基準点)となるもので、その位置を示すために埋められているのが三角点と呼ばれる四角の標石です。

地図の中では△の記号で表されており、この三角点は全て経度、緯度が正確に確かめられており、

陣ヶ尾、伊勢山、猪口山

(二月月例山行)

中野 稔

月例山行に参加をするようになって六年目になる。この世に来て半世紀、若い頃考えていた事と、今考える事は狭くなった一面と、深くなった一面があるが、幼い頃

の考えは壮大だったと思う。スパー・ポジティブ・シンキングとでも言えそうな考えだ。日本語で言えば、大ボラ。それを文章にすれば間違いなく没だし、読者の罠をかうに違いない。だから、その考え方を殺して、文章にする事は気が狂いそうになるほど辛い。少数の人たちの生き様を見ていると、贅沢な悩みかも知れないとも思う。

何時でも初心を忘れずに、見えるもの、感じるものすべてが問題ではなく答えだと云い聞かせ、悩みや苦勞は、身から出た錆と思えば問題は無い。それでも、大多数の生き方を模倣する事は、私には出来そうにない。

さて、二月は200メートルの山に登る。予定の伊勢山に登る前に陣ヶ尾(875m・点名)：臨



(陣ヶ尾にて)

願)に登った。県北の中津から日田にかけての山岳地帯は県南以上に低山の宝庫だ。出来る限り安全で楽なルートを選んで山に登る事を心掛けていた。特に単独登山が多い私にとっては必要な事だから。

東に鹿熊岳、西に傘山がある標高三五〇m位の鹿熊開拓地区の一角だ。登山口は牧舎の脇から尾根を目指した。参道の様な登山道を登ると祠が迎えてくれた。殆どの家に仏壇がある様に殆どの部落に神社やお寺、祠が名もなき山頂に鎮座している。牧舎で働く人が居たので、帰り際お礼の気持ちを送って挨拶をした。

次の伊勢山(888m)は、国道二一 一二号線の下郷入口信号機から北に二〇〇mぐらい行った所が登山口だ。国道脇の公民館の広場に駐車させて貰い、国道を渡って石段を登った。伊勢山大神社とあるが明治時代に造られたような感じがした。国威を鼓舞するような言葉の掘られた石碑などがあり、富国強兵時代の面影がある。山頂は神社の裏の高台で、ちよつと広い広場には貯水タンクがあり植林の木々が静かに見守っていた。

次も今日の予定の猪口山だが、その途中でちよつと寄り道。青ノ洞門の対岸に在る三角点だ。本耶馬溪の役場(支所)の裏手の高台にある、サッカー場の駐車場に駐車。すぐその北にある竹藪の中に強行突入だ。高低差二〇〇mの登山である。一〇時丁度に点名「山

角」1233mに到着。開かれた山頂部も展望はあまりないが、眼下に建物があり神社の屋根も見えて、道路がある様に見受けられた。次は標高889.7mの猪口山だ。猪口山の南隣にある渋見山(821.5m)は行くかと思つたが今回は見合わせる事になった。三光白木の平原辺りから南下して堤に出てその辺が登山口となる。

天気予報の通り、雨がぱらつき始めた。面倒でもしょうがない。雨具をつけて出発だ。中腹まで林道があるが何故か藪漕ぎをさせられる。赤いテープも当てにならない。少し位は苦勞しなけれは昼食が不味い。空腹は最高の調味料なのだ。満腹に美味いもの無し。

二〇分ほどのヤブこぎで山頂に着いたが、広い平らな頂上で、GPSを頼りにヤブのかなを三角点探し。十一時半山頂着。もちろん期待どおりで展望はない。どうやら本降りになってきた。長居は無用。下りは少しは迷つたもののGPSのお蔭で記憶のある場所に出る。

十二時に駐車場着。降りしきる雨のため、昼食場所を探すのに本日も一番苦勞した。中津市内をドライブし大貞公園の近くの神社の建物の中で休憩。近隣の子供たちが落書きをしていた。子供達の幸せを昼夜違わず祈り続ける親たちには書けない代物だ。

- ・陣ヶ尾 8:10~8:30~8:50
- ・伊勢山 9:10~9:30~9:40
- ・山角 10:00

・猪口山 10:46~11:30~12:30
(猪口山にて)



(猪口山にて)

1フは快走。富貴寺を過ぎて、そのすぐ先の陽平の富貴寺茶園工場のカンパンを左折。上にあがると、一面の茶畑、右の牧場に牛に餌をあげる小屋あり、地形図通りそこを右に上がる。まず最初に着いたのが「外畑」(248.9m・四等)で、せまい農道のわきに旗つきの紅白のポールと会う。七時四二分。すがすがしい朝の冷気の中、三六〇度の展望、一等に昇格してあげた。この雰囲気の中で作業すればいいお茶ができよう。またきてもよい。

参加者：飯田、木部、徳丸、中野、西、牧野

大カ山(304.9m)ほか八つの三角点

(三月月例山行)

安部可人

三月は三〇〇mの山で、大カ山をめざして豊後高田の田染から富貴寺へと向かう。

雨続きのあとの、予報通り春の好天気、13.7℃。飯田、中野、岐部、牧野、安部乗車の二台のサ



(大カ山にて)

つぎは今日の目的の山、大カ山(304.9m)だ。牧場にもどり、さらに茶畑の中を行くと、林には入って悪路となり、やがて朽ちた小屋の前に着く。小屋の前の空き地に駐車。そこは大カ山の南を通る古い道路の跡だが、道はヤブで完

全にふさがって、代わりに山の北側を巻く道ができています。ここより北に尾根を登って三分、ありがたや、楽々と三等三角点を見る。八時。
次ぎは「朝ノ迫」へと、右手に屋山をみて気持ちはよいが、泥の軽トラ道、陽平へ引き返す。そこから東へすぐ地形図の林道を入り、南へすすんで地形図にない池あたり

に駐車。荒れた林道から、廃道へ入り、平坦な尾根を道が西へと続き、たのしいハイク。約三〇分、九時三〇分着、四等(288.9m)。(中野氏はここもすでに終了、二回目)
四番目は「富貴寺」、富貴寺の裏手の稜線だ。(皆、初めての山)
富貴寺から西へ、西叡山を見て、1.5km、小さな橋のたもとから北へ農道に入る。入り口に田邊孝市翁徳碑を見て北へ約1km、溜池の手前の二又道に駐車。荒れた林道が田圃の脇を通過して上に続くと、やがて地形図にない作業道が右に分かれていた。これを行くと、一五〇mさきで、左へ(南東へ)国土調査のために切り開かれた道あり。今日はじめての急登、四五m差。登れば西へ散歩の稜線道。地図では相当のヤブこぎと思いきや、超短い二、三分間の遠足気分、すもつくない山だが、たのしい。一一時六分着、四等(204.1m)ここも旗つきのポールが立つ。
五番目は見晴らしのよいところ



(西叡山にて)

田に向かって二度桂川を渡り、案内柱にしたがって左折。立派な舗装道路を四km上がると、大駐車場、WCあり、ちょうど一二時のサイレン。西叡山高山寺山門から立派な遊歩道二五分で念願の西叡山(710m)二等三角点着。

簡保の援助で造られたと書かれた展望台がある。国東のほとんど全部の山が見える。その雄大な眺望の中で、昼食、大休止。

さて、お次ぎは、すぐ下の三八〇mあたり、西叡山から下る車道から東へ入る道がある。だが、すぐ消えて、なんと砂防堤から先はヤブだ。しかし、約一〇分で六番目の点、「田染」四等(255.8m)につく。二時八分。
最後は安部さんのリクエストで西隣の霧笠山(368.8m)へ。矢原の佐々木碎石工場から入り、石材プラントの廃虚の横に駐車。安部さんはヘルメット着用、さあ気合をいれて出発。まずきれいな沢をわたり、すぐ右のスギ林に踏み込む。入り口には柿色プラスチックに「霧笠山登山口」と書かれた案内板があった。林の中はいきなり急登で、岸壁の基部に行き当たると西に巻いて登っていく。最後はかなりきわどい岩場の直登。安部さんおくれるが、優しい仲間が待ってくれる。
登りつくと岩稜の肩で、展望が開ける。そこからは稜線登りで、二度ほど樹林を抜けて岩稜の上の展望が楽しめる。途中の岩にザックはデポ、慎重に腰をおとして登る。やはりかなりの難関だが予想したほどはない。
数日前、四浦半島の高平山の単独登山できちんと足は慣れている。三時一五分、霧笠山、四等三角点到着。六〇分かつたかと中野さんが言う。悪くない。彼のH一八・一二の記録では五一分となっていた。
東側には、碎石で大きく山腹が削り取られた西叡山の姿。これは残念だが、絶景の下山路。やはり下りは楽々である(安全第一、安部は一度だけロープ使用)。
最後におまけにもう一つ。桂川を西へ、華岳トンネルをぬける新設広域農道へ入り、すぐさきの道路の東側、路肩の下の低いところ。草むらに埋もれて可哀相な四等三角点(45.8m)、「稲葉」を発見。「時々こんな低い変な場所に設置

された三角点がある」と、周りを大掃除しながら、飯田さんの話。四時三〇分、ちょうど勤務時間終了。ありがとうございます。

(霧笠山にて)



参加者：安部、飯田、岐部、中野、牧野

附記

最後の霧笠山、いつも独り山行きの私にはもう無理・・・とあきらめていたが、このかくれ名山を消化できて、感謝！

傾山 むこうかまど谷 遊行②

久保洋一

前方のコルらしきところで木立の間から空が見え出しもう少しでコルに着くはずだと思つて山頂に近い30のポイントへナビを開始すると目的地まで850mくらいあるのを見てがっかりする。気を取り直してGPSの次の目的地までの距離のカウントダウンを楽しみにしながら少しずつ登っていく。いよいよ沢の水もなくなつたところだったか、雷の音がした。最初は弱く雲間での放電の音だ、少し

弱くなるが今更引き返すことはまったく考えなかつた。目的地まで500m、600mくらいのとこにいたつた。いよいよコル、突き上げる斜面だ。ここで一頭、鹿を見かけた。斜面はかなり急である。息があがる。少しずつ目的地までの距離が減るのを頼りに登る。今度は10mほど先の草むらから急に小鹿が飛び出した。こっちもびっくりだ。

水辺だからだろうか、ぶと？が群がっているところを2、3箇所通過した。このとき手や耳を10箇所ちかく刺された。尾根道ではあまり遭遇しないのに沢ではこんな虫対策も考えなければならぬのかなーと思つた。

途中までは滝の高巻き以外はそんなに登っているという感じはなかった。ただコルに突き上げるこのあたりはさすがに斜面は急で、疲労も手伝つて一歩一歩が堪えた。ジグザグに登っていく。

山の端から空が透けて見えるぐあいを見ると、もう少しでコルに着くと思うのだが、なかなか着かない。沢の登りは最後にこれが待っているのだなーとしみじみ思いながら、少しずつ高度を上げていく。

目の前に、以前冷水コースから登ったときに記憶のある景色が現れた。もう20、30mも上がれば通常のコースへでる。そう思いながら進むとぼつちり一級国道並(加藤さんの名言)のりっぱな道に出た。

後は山頂までの道はだいたい覚えていた。だけど少しバテ気味になつてなかなか思うように進めない。ほんとに一歩一歩だ。牛歩ならぬ蝸牛歩だ。やっとこさ後傾山と傾山を結ぶ稜線へ合流。あと少しだ。ようやく傾山山頂到着1355。

雷が気になるので山頂の標柱と三角点を撫で1秒もせず山頂をあとにする。傾山はもう十回以上は登っているから、また次の機会に山頂でゆっくりするのを楽しみにしてここは安全第一だ。これから三つ坊主は雷が怖いので巻いて水場経由で三つ尾へ。雷は相変わらず鳴っているがまだ雲間の放電だ。

尾根からはずれて少し下つたので急ぐように指示した。

雷はそんなに怖くなくなつた。話はそれるが私がこんなに雷を怖がり出したのは大学3年生のとき。白馬岳に登つたときだ。6人のパーティーで私がリーダーをして、猿倉から登つて行った。第一目には白馬尻あたりでテントを張り、次の日、大雪渓を登つた。そのとき女の子の一人がバテてしまい、その荷物も私のザックの上へ。それでなくてもテント道具一式、スコップ、ホヘブス、ホワイトガolin等々も全て私がつけている、それにさらに女の子の荷物が加わつたのだ。

雪渓を踏む一歩一歩がずしっとくる。上から下りて来る登山者はぱつと両脇によけてくれ、わつた変な重労働だと言ひ始末。私は上の方を見ると目まいがしそうなので努めて足元を見ながら一歩一歩と登つていった。何とか山頂近くでテント場まで着いたがバテテしまった。

次の日、後は白馬に登つて小蓮華から蓮華温泉はずつと下りだから大した事はないと思ひ、お昼くらいまでゆっくりして出発したのだ。これが夏山ではとつてもまずい事だつたのだが。小蓮華のピークに着いたあたりで休んでいるときかすかな雷の音を聞いた。他のメンバーは誰も気付かなかつた。みたいだが、私は森林限界を超えた稜線での雷との遭遇はまずいと思ひ、「山の雷は移動してくるの

でヤバイぞ」とすぐに出發させ、

急ぐように指示した。しかし雷は鳴るたびに近づいてくるのがわかる。もうヤバイなと思つたとき私はザックを降ろさせ少しザックから離れたところで(ザックには金属があるので)ポロンチヨをかぶつて全員に伏せるように指示した。そのあたりはハイマツ帯だつた。まだ光つて8秒くらいだつたのでメンバーの一人(同級生)が「リーダーだせーよ。こんな雷怖くないよ。」と言つて立ち上がった。するとかなり近くに雷が落ち、さすがに彼も慌てて伏せた。それからほつと接近し、光るとほとんど同時にバリバリバリバリと炸裂音とともに近くに落ちる。お腹はその炸裂音で振動する。

次の日の新聞が頭によぎる。私は目を閉じ、耳を塞いでいたがポロンチヨを一縮にかぶつて伏せた女の子がたまたま私の膝に手をあてていて光るたびにきゅつと握り締める。私は光つたんだなと思ひ震えるという状態がしばらく続いた。少しして私は光つてから音のするまでの秒数を数えたが8秒ほどになつたので通り過ぎたなと思ひポロンチヨをめくつて外を見た。すると少し距離があつたが真正面でないばかりが地上に走つた。またまた慌ててポロンチヨをかぶつた。こんな経験が過去にあつたのですっかり雷恐怖症になつてしまつている。特に山では。

(以下次号へ)

イギリス湖水地方 トレッキング②

下川 智子



る。右手にロッククライミングで有名なピラー山が聳え、下にはリズ川が流れている。しばらく上りの道を登ると左手に、このルートを開拓したウェインライトの遺灰が山頂に眠る山が見えてくる。周囲は緑の山と溪谷で実に美しい。一時間毎にワンバナナストップをとりながらアップダウンの激しい道をひたすら歩く。石ころだらけの歩きにくい道を苦労しながら下りていくとホニスターズレートメインに着く。ここは石切り場で近くの山から採掘した緑色の石を瓦に加工していた。カフェも併設していたのでここでツーバナナストップ。疲れた身体に温かい紅茶がとてもおいしかった。そこから一時間半歩いて今日のゴールのシートラーに一六時三〇分着。マイクロバスでクロウパークホテルに一七時三〇分着。

を見学。その後山すそから岩だらけでころころした歩きにくい登山道をゆっくりトラバースしながら登る。冷たい風が吹き始めあおられるように歩く。風をさげ大きな岩陰でワンバナナストップ。しかし強い風と寒さで手がかなわずザックから食料を取り出すのも難しい。すぐに行動開始、三〇分ほど登ると湖水地方の別のトレッキングルートと交差する尾根に出る。体が飛ばされそうなほどの強風が吹きとても寒い。周囲の山は分の久住山、湧蓋山そっくりの山もあり思わず声をあげる。突然雨が激しく降り始め一同雨具を着け急いで下山開始。途中、「ライオンと羊」と呼ばれる岩山に上る。雨が激しく風も強くなり皆次第に無言になり石ころ道を転ばないよう細心の注意を払いながら坂道を下る。一六時二〇分やつとゴールのグラスミアに到着。今日は高度は500m位だったけれどアップダウンの繰り返しで天候も悪くハードなトレッキングだった。シートラーからグラスミアまで14Kmを六時間二〇分で歩く。

率80%のため、皆速いペースで進む。フットパスを越えると、一気に登山モードになり緩やかな坂を登り続ける。周りは緑一色の牧草地であちこちに羊の群れが見られる。十一時タング着。ここから二つのルートに分かれるが、全員の意思で「険しいが距離が短い」ルートを選ぶ。すぐに石だらけのダラダラ道を登り始める。雨が激しくなり雨具をつける。雨が冷たく風も強くなり、全員頭を低くして一心に登り続ける。十一時四五分、大きな岩陰で小休止。山頂近く突然大きな池が現れる。久住中岳の御池を初めて見たときの感動を思い出す。池の左手には有名な「ヘルマデン」という山がそびえている。しばらく行くとワーズワースが弟の戦死を悼んで書いた詩の記念碑があった。小休止の後、再び雨が激しくなったので急いで下山。途中、羊飼いの休息小屋や、黒毛牛の体の真ん中に白い帯のような縞模様珍しい牛など見かける。

一五時、ゴールのバターデールに着く。迎えの車を待つ間、近くのパターデールホテルで各々ビールや紅茶を飲みながら今日の行程や各自の旅の話など和やかに話す。宿泊したホテルはもちろん休憩のため立ち寄ったホテルでも、雨でずぶ濡れで泥だらけのウォーカーを嫌がる風もなく当たり前に受け入れてくれるのに感心する。

今日のB&B、ノッツミル、カントリーロッジは家族経営のアップ

アルプス 旅行記 ①

星子 貞夫

期日 2008年7月15日～8月1日

メンバー 星子貞夫、今山アヤ、福田かつ子、池辺幹夫、池辺明美、布谷英生、布谷ゆきえ、伊賀上清香、永井邦子、坂本映子、城全統一、雪野佐喜子 以上13名(敬称略)

コース モンブラン山群、バリス山群ツェルマット、ベルナーオーバーランド三山、ウエンゲン、シュトホルン

7月15日 旅の始まりはいつも朝が早い。町が眠りから覚めて喧嘩が始まる

(湖水トレッキングスタート時の記念撮影)

六月十六日(月) 二日目
五時半起床。九時半出発。フラットな舗装道路を約三〇分、昨日と同じく競歩のようなスピードで歩いてエナーデイル湖に到着。湖は標高500m、600mの緑の山々に囲まれている。湖に沿って作られた小道はゴロゴロとした石の道で歩きにくい。

途中に「ロビンフッドの椅子」とよばれる大きな岩がある。二度のバナナストップをはさみ約二時間の歩いて湖の道を抜けると森に入

エナーデイルブリッジからシートラーまで23Kmを六時間三〇分で歩く。

六月十七日(火) 三日目
六時二〇分起床、九時半ホテル出発。タクシーでスタート地点のシートラーへ。一〇時シートラー出発。今日は距離は14Kmと短い難コースで、しかも午後

は雨の予報のためスタート直後から皆昨日以上の早いペースで歩く。こちらはほとんど小走り状態。おいていかれないよう必死でついていく。一〇時半、カンブリア村着。一七世紀に建てられたバイキングの建築様式が残された村の家並み

一〇時一〇分スタート。雨の確

六月十八日(水) 四日目
六時三〇分起床、九時半ホテルスタート。マイクロバスでスタート地点のグラスミアまで行く。四

日目ともなると、「今日も一日歩けるだろうか?」という不安はなくなる。皆とすっきり打ち解ける。

今日

今日

前、不安と希望の入り混じった気持ちで早朝の電車に乗り込む。電車の中で黙々と朝食をしているメンバーの一人を見て心強く幸先の良さを感じ安心する。

今回はユーロとスイスフランでドルは関係ない。福岡空港で両替をする。荷物の重量制限を心配したが、36kgのバッグがフリーパスしたので安心する。

韓国の仁川空港で東京組と合流しチューリッヒに向かう。大韓航空のサービスはとて良く、食事も美味しく、ワインやビールも飲めて長時間の飛行も気が紛れる。西廻りの飛行は7時間の時差があるにも拘わらず、同じ日付でチューリッヒの国際空港に着く。タ刻チューリッヒ国鉄駅近くのホテル・レオネットにタクシーで移動する。



ホテルにチェックインして夕暮れせまる町をチューリッヒ湖から流

れ出る、リマト川の畔を、東天に輝く月を見ながら散策する。

7月16日

今日は失敗のスタートである。インターネットのスイス国鉄時刻表のプラットホームの番号が違って慌てて移動する。布谷夫人の英語力で助かる。発車時間間際に飛び乗ったので、一等車に乗ってしまい、二階立ての列車の移動に苦労する。ベルンを経由しローザンヌの乗換も無事におわり、レマン湖の畔を電車は走りマルチーニに着く。ホームの移動もスロープが出来ていて楽である。かつては階段であった。



シャモニに行く登山電車はアプト式の車両である。スイスとフランスの国境で電車を乗り換えシャモニにつくホテル・リッチモンドに移動する途中アルプ川に掛かる橋の、ド・ソシュールの銅像の前でモンブランとエギュー・デイ・

ミデイーの姿を仰いで記念写真を撮る。

7月17日

ジェット・ラグ(時差ボケ)の解消と休養のため、軽いトレッキングに行く事にしてラック・プランにでかける。ホテルでもらった無料チケットでプラの部落にバスで行き、ゴンドラでフレジエール877mに上がり、さらにスキリフトでアンディク 2385mに着く。雪渓を踏み、カモシカ等の遊ぶ岩場を通りラック・プランの畔のレストランに着く。ここからはモンブラン山群のすべてがみられるが、今日は雲が厚くみえな



い。帰路はフレジエールに下り、プラの礼拝堂で写真を撮る。残念ながら背後に屹立するドリユウの姿はガスの中である。此の頃から雨が少し降り始めたがすぐに止む。ホテルに帰り今回世話になったエージェントでシャモニ在住の神田美智子さんにお土産の大分産シイタケを、やはりシャモニ在住の神保さんに焼酎の黒霧を持って行く。かつてジンボジェットと

思えば神保さんと初めて会ったのは1990年7月であった。仲間7人でシャモニに来てモンブランのバリエーションルートを完登した時、アドバイスを頂いた。

7月18日

今日はモンブラン山群最大の氷河であるメル・ド・グラス氷河を遊行しレシヨ氷河の末端の右岸を登り、山小屋クーベルクル 2688mに行く日である。ルートはシャモニの駅裏から出る登山電車でモンタンベールまで登る。ここから氷河で磨かれた垂直の岩壁を梯子で下り氷河に立つ。1998年7月にこのルート



を歩いたが、その時より氷河のレベルが30m下がって、白く美しい氷河の表面が岩屑に覆われて黒く汚い。かつて白く優雅にS字型にカーブしていた氷河のみじめな姿に落胆する。

レシヨ氷河がメル・ド・グラス氷河に合流する所から右岸のモレーンを辿り梯子に取付く。しっかりした梯子と鉄棒の手すり、ルートは安全である。モンタンベールで氷河に降りる梯子、そしてクーベルクルへ登る垂直の梯子の出現に皆驚いた様子であった。しかし行くしか無いと覚悟を決めたようである。

皆ぐんぐんと登って行く。岩壁が終り、小川の流れるアルプを花々やマーモットに迎えられる。しばらく行くと左側にクーベルクルの小屋が見えてくる。



ベルト針峰への登山基地である。メンバーは体力に差があったのでトップとラストで一時間ぐらいの差は有ったが全員無事小屋に着く。予定時間よりかなり遅かったがメンバーの年齢と登山経験を思うと、

皆良く歩いたと思う。2リトルで14ユーロの赤ワインで乾杯する。その夜は晴れた夜空に月が輝いていた。

(以下次号へ)

私の無名山ガイドブック37

飯田勝之

里山の稜線歩き

(その8)

今回は西国東の里山の稜線歩きコースを二つほど紹介しよう。

「神酔石」(351.7m)

この思わず探求心をくすぐるような名前の三角点は、旧山香町と旧大田村をつなぐ県道の金谷隧道の北にある小ピークだ。金谷隧道の北側出口が登り口となる。両側の擁壁の高さがなくなり、道路とほぼ同じ高さになるところが入り口で、二万五千分の一地形図では破線が稜線を越えて西の川上流に通じている。

地図の道はほとんど判然としないうが、入口は細いハチクのヤブで、

かき分けると道らしきものがある。これをたどるのだが、数十mで竹林が終わり、クヌギやナラ、カエデにカシ、シロダモなどの混交林になると、踏み跡がほとんど分かんなくなると。しかし、ほとんど平らな緩い斜面を西に斜めに登っていくと、県道から一〇分ほどで稜線の広い平らな鞍部につく。

あたりは照葉樹を中心とした林の中で、ちよつとした憩いの空間だ。ここより南西の方は低木のややブツシュの稜線となっているが、北東に登る稜線は素晴らしい樹林の中で稜線道が通っている。

アラカシやタブ、シイ、ヤマモモなどの木々の下を、緩く上ると鞍部から五分ほどで平らな長いピークを通過する。そして、快適な稜線道を緩く下りほとんど平らな道を緩く登り返していくと、大きな岩が稜線道の脇にあり、古いアンテナの残骸も見られる。その横を通過し、二、三分で広い山頂に達する。山頂の北西の端に大きな岩がある。この岩は地上に出ている部分で、直径七、八m、高さ約一、五mほどで、岩の根元には国土地理院の三角点標識と、「神酔石」と書かれた白い板の小さな山頂標識もある。三角点はこの大きな岩の上によじ登れば、その真ん中に四角な四等三角点の標石が埋め込まれている。

下りは山頂から北にやや急な斜面を下るとよい。往路ほどはつきりした踏み跡はないが、真北に稜線を下れば、傾斜が緩くなる稜線

はやや東にを曲がりながらさらに緩くなる。そしてしばらく行くと平らな鞍部に達する。ここより真東に向きを変えて、樹林の中を下ると、途中、低木の混んだややブツシュ気味の帯を通過し、再び照葉樹林の中の、歩きやすい林床の急斜面で、どんどん下れば稜線から一〇分ほどで登り口から300mほど下の道にでる。



(神酔石)

参考タイム：県道一〇分、鞍部一五分、神酔石一五分、県道二五〇〇分の一地形図：若宮

「六惣」(332.28m)

神酔石の南東にある「六惣」という三角点も良い山の稜線がある。登り口は旧大田村の波多方と、旧山香町広瀬とをつなぐ県道の、山香道の集落がよい。集落の一番西

奥の民家に向かって細い道があり、この道はさらにその奥の林の中へと続く。

最奥の民家の裏で道が二手に分かれるが、右に家の裏に回り込むように進むと猪避けの柵があり、これを越えて林に入る。古い道があり、道に沿って黒い細いケーブルが地面を走っている。これを中腹までの目印にすると良い。わずかにそれと分かる古い道は、西に斜めに登っているが、すぐにスギ林の中で途絶えてしまう。ケーブルも右手のマダケのやぶの中に消える。

スギ林に入ると真つ直ぐに上に向かって直登していくと良い。数分でスギ林が終わると、傾斜がいつそう急になり、灌木の二次林となる。やや右手に登るようにすると、黒いケーブルが地面や木の枝を伝って斜面を登っているのに遭遇する。このケーブルに沿ってひたすら急登すると、数分で左手がヒノキの林、右手が天然林となりやや傾斜が緩くなる。

この植生境を登ると、直ぐにまたヒノキ林は終わり天然林となり、いつそう傾斜が緩くなる古いアンテナの残骸が倒れていて、ケーブルはここまでで終わる。このあたりから上は見事な天然林で、緩い広い斜面は天神原山中腹の林に似た雰囲気を感じさせる。それだけに、帰りは完全に方向を見失いやすいところなので、自分なりの目印を付けていかないと途中でもない方向に下ってしまうだろう。

傾斜が緩くなり、ヒノキの植林が現れると三角点山頂は近い。ここは田原山東の三角点から北に派生する稜線上の肩で、広い鈍頂の真ん中に四等三角点がある。



(六惣)

参考タイム：山香道二〇分、アンテナの跡一〇分、六惣一五分、アンテナの跡一〇分、山香道二五〇〇分の一地形図：若宮

お知らせ

五月月例山行のご案内

- ・月日：五月三十一日(日)
- ・目的地：上野台(770.7m)、野

稲岳(1037.7m)と奥江温泉
(由布市・湯布院町)

・ 出 発：五月三十一(日)

午前七時サニ一出発
現地集合：南由布院駅に午前八時集合

※ 註 会員の喜寿のお祝い山行と併せて行います。

※ 定例総会資料に記載した日程は、本部総会日程と重複したため、変更になりました。間違いないように。

六月月例山行の案内

「案内

・ 月 日：六月二日(日)

・ 目的地：丸笹山(1374.4m)と南郷温泉(宮崎県・美郷町)

・ 出 発：六月二〇日(土)

午後四時サニ一出発

※ 出発時刻等は、参加者同士の相談によっては変更することがあります。

七月月例山行の案内

「案内

・ 月 日：七月二日(日)

・ 目的地：三ツヶ峰(989.6m)、高岳山(1040.7m)と願成就温泉(山口県・阿東町)

・ 出 発：七月十一日(土)

午前六時サニ一出発

※ 註 一泊二日で近くの山口県の山に上ります。

八月月例山行の案内

「案内

・ 月 日：八月二六日(日)

・ 目的地：岩井川岳(1522.0m)と

赤川温泉 (竹田市・久住町)

・ 出 発：八月一六日(日)

午前六時サニ一出発

・ 日時：五月三日(水)

一八時より

・ 場所：大分市府内町

「コンパルホール・三〇七会議室」

・ 議題：①青少年体験登山大会を

始め当面の取り組み地について

②五十周年記念事業について

③その他

※ 役員の方は必ず出席して下さい。

事務局よりお知らせ

支部役員会の開催(通知)

三三は何処?



・ この写真は何処から何処を撮ったものでしょう?

・ お分かりの方は事務局まで はがきでお知らせ下さい。当たった方には記念品をさし上げます。

(二名までで、正解多数の場合は抽選します。)

○ 日 締め切り六月二〇日

前回の正解は鹿嵐山から八面山を撮ったものでした。

喜寿のお祝い

登山会

今年喜寿を迎える会員がいますので、お祝い登山会を実施します。このお祝い登山会は五月の月例山行と併せて実施します。会員・会友の多くの皆さんのご参加をお願いします。

○ 今年喜寿を迎える会員

西 孝子

○ 日時 五月三十一日(日)

※ 登る場所・時刻・日程等詳細は五月の月例山行の欄をご覧ください。

後記

○ 「支部の先達を語る」は原稿が間に合わないため、今回はお休みとしました。

○ 「会員所属の山の紹介コーナー」は事務局で知っている会についてはおおむね終了しました。ほかに、自分が所属し、紹介したい会がありましたら、是非お知らせ下さい。

○ なんだか、年々春の訪れが早まっていると感じるのは私だけでしょうか。

○ 三月中旬にヤマザクラが開きはじめてと思ったら、四月二〇日過ぎの大船山中腹ではシヤクナゲとミヤマキリシマが開きは

じめていました。
○ 四月上旬にツバメが飛び、なんと、野津原の山道ではヤマカガシが這っていたのです。

○ 九州の空は、このところ四季を通じて黄砂と煙霧が覆い、くつきりと遠くの山並みを見ることはできなくなってきました。

○ 地球温暖化対策、エコロジ対策はまさに地球・人類全体の一番深刻な問題だと・・・つくづく思います。

(K・I)

日本山岳会東九州支部報 第45号

2009年(平成21年)4月25日(土)

発行者 梅木秀徳

編集者 飯田勝之

発行所 〒870-0021

大分市府内町1-3-20

サニースポーツ内 西 孝子方

TEL・FAX 097-532-0926

題字 (故)佐藤正八